

食卓に向こう側

第10部 脳、そして心

小学五年の男児が描いた朝食の絵がある。私立小への通学途中だろうか。電車の中で一人、おにぎりをほおぼっている。家庭の食卓と切り離された孤独の世界だ。

農水省やJAで構成する「朝ごはん実行委員会」(東京)は今年一月、首都圏の児童五十人に食卓の風景を描いてもらった。「心を受け止める家族関係の希薄化が進んでいる」。聖徳大学教授(発達・臨床心理学)の室田洋子は、ため息をつく。分析はこうだ。

「忙しい、忙しい。食べないとおなかがすく。他人の視線は気にしない。食べ物を胃袋に詰め込むだけ。」

こうした朝食の「現実」と同時に委員会は、「理想」も描いてもらった。電車の男児は、湯気が出ているご飯とみそ汁、ウインナーなどを並べた。それも画面の半分を占めるほど巨大だ。そして、ほおぼえお家族五人の姿を配した。

「大きな茶わんは、普段はこんな食事をしていないことの流れ」と室田。本来、食卓には、人間関係が凝縮されていると、「受け入れてもらえる安心感があり、自分の居場所も確かめられる。食卓は会話に入る間合い、聞く態度、人の気持ちを察するなど」「ミニエニケーション力を形成する場でもある」と訴える。

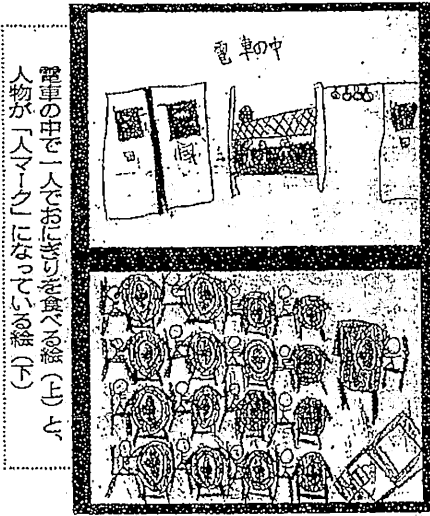
× × ×

動的家族画(KFD)と呼ばれる手法で、十年以上調査に取り組む室田は、絵の表現を十二タイプに分類する。

例えば、「人なし・食物のみ」の絵は、強制される食事を投影。丸と直線という「人

孤食

マークに置き換えられた人間は、会話のせしめを要す。手が描かれていない「手なし人間」は、食欲も食欲もないと解釈され、一人で食べられる姿は、よりどころを求める気持ちの反映だ。画面からはみ出すような人物を描くのは怒りや攻撃性を、豆つぶの小さな人物は心の萎縮を示す。「家族」は三割弱、「自分」



電車の中で一人おにぎりを食べる絵(上)と人物が一人マークになっている絵(下)

△が「割れた」。

調査によると、家族で食べる手も私たちの絵に、「何らかの問題がある」とみられるケースが増えている。職探いや職業訓練をしない二一〇二年推計)に達していることを踏まえ、室田は「対人関係を避け、友だちとの関係もますます希薄になりつつある」と警告。

家庭教育面から不登校、引きこもりを研究する福岡女子大教授(心理学)の山口快生(むつむ)「食卓は親の考え、生き方を自然と伝えていく場。忙しくても一緒に食事しないと、子どもの悩み、成長のサインを見逃してしまふ」と分析する。

× × ×

「せつかく合格したのに、なせ行かない」

本命の有給私立中に愛か二カ月。不登校になった娘に、両親は怒りをぶつけた。成績優秀な素直だった娘。二年半の塾通いの末、手に入れた誇らしい中学生活のはずだった。一年たっても状況は変わらず、思い詰めた母は臨床心理士の室田を訪ねた。

働きついで夜遅く帰る父と、教育熱心な母。食事は家族ハラスメントで、たまに家族がそろっても話はずばりに交戦。食卓でさえ両親は、勉強はと繰り返していた。

室田の助言通りに母親は、食卓に菓子作りの本をそっと置いた。自ら「シフォンケーキを作る」と言い出した娘。母親は注文をうけず、洗いや手を伝つた助手役に徹した。毎日のように挑戦したが、なかなか膨らまない。失敗し

絵が物語る希薄な関係

てべつたんこの堅いケーキを一緒に食べた。父親も早く帰る食卓を囲むように努めた。娘は自然に読書を始め、自分の世界を広げ始めた。「行ってきます」。ケーキを焼き始めてから一年後、娘は学校に戻った。管理する人から、助ける人へ変わった母とともに築いた新たな親子関係。食卓には、ふたりのケーキがのこっていた。(敬称略)

連載に関する感想、意見をお寄せください。〒810-8721 西日本新聞社 編集企画委員会「食くらし」取材班へ。ファクスは092(711)5004。メールはshoku@nishinippon.co.jp